

著者は都市に集中する難民の生存基盤獲得に関して、「イスラーム的 NGO」の役割に注目している。すなわち、当該組織は都市内部における「即応対応力」を発揮して緊急援助的な対応に強みを見せるだけでなく、難民支援のための長期的な支援要素を備えて活動しているのである。またこのような物的なニーズへの対応のみならず、当該組織はその活動を通してイスラームという社会に共有されている価値を可視化することで、「宗教的な要素が現代に息づく場として存在する」ことが強調される。著者の指摘するように、これまでのイスラーム主義に関する研究の中で、当該団体の福祉などの社会活動に関する客観的評価には、あまり重点が置かれなかった。それは中東におけるイスラーム団体の福祉活動が、特に政治組織としての性格を有しているムスリム同胞団の研究に見られるように、その政治的影響力の拡大に注目するあまり、当該団体の社会活動そのものに対する評価を行わずに、あくまでも影響力拡大のための道具とみなす傾向があった。いわば政治的影響力拡大という目的を効率的に達成するために組織が、合理的計算のもとにその社会的影響力を拡大しようとするホモ・ポリティクス的な存在として扱う傾向があった。これに対し本書は、イスラーム的 NGO は、「即応対応力」を発揮しつつ、イスラーム的価値の社会的可視化の役割を担っているとの評価を下しているのである。ここで、これらの団体が逆にいわばホモ・イスラミクス的な存在であるがゆえに、イスラーム的価値を実践しているのかどうかという問題が出てくるが、これに関しては FBO (Faith-Based Organization) の概念を援用し、「イスラーム的 NGO」の概念の用語が、ムスリムがムスリムのために働くことは「そこにはなにがしかのイスラーム的な価値観が反映されることになるはずである」[子島 2014] との意味で使用すると本書の立場が示されている。「イスラーム的な価値観」という幅を持った概念をめぐっては、更に精緻な議論の展開が求められるものとする。

本書によると著者は、シリアを研究のフィールドにすることを志したが、近年のシリア情勢の影響もあり、ヨルダンを研究の拠点としたとしている。近年の中東研究は、研究者自身が現状からの挑戦を受けている状況にある。著者はこのような逆境の中から、独自の総合的地域研究を実現させようとする試みを行い、新たな研究の方向性を示すことにみごとに成功しており、さらなる研究の発展が期待される。

<参考文献>

- 杉原薫 2012 「熱帯生存圏の歴史的射程」 杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生(編)『歴史のなかの熱帯生存圏——温帯パラダイムを超えて』京都大学学術出版会, pp. 1–28.  
子島進 2014 『ムスリム NGO——信仰と社会奉仕活動』(イスラームを知る 21) 山川出版社。

(北澤 義之 京都産業大学国際関係学部教授)

---

大稔哲也『エジプト死者の街と聖墓参詣——ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史』山川出版社 2018年 v+413+129頁

中東地域に身を置くと、モスクや廟墓に参詣、訪問する人々の様子を頻繁に見ることがある。イスラームの礼拝に行く人もいれば、それとは違った行動をする女性の集団を見ることもある。その現地の人々の行動を見るにつけ、中東の人々の行動様式や、それを引き起こす思考様式がどのようなものであるのかを知りたい、理解したいと考えることがある。エジプトにてそのように感じた方は、本書がその世界がどのような世界であるのか示してあると感じられるに違いない。本書が対象とする時代が歴史的な一時期であるとしても、現代の人々の世界観や実践の理解に対して総合的な理解につながる「世界」の理解に一つの視点を与えてくれると考えられる。そのような本書の刊行を慶賀したい。

さて、そのような『エジプト死者の街と聖墓参詣』について見ていきたい。本書は、エジプト・カイロ市内の「死者の街」に関する「歴史人類学」的な研究である。本書の記述は、12–15世紀を中心にして、9–17世紀くらいまでを対象とし、エジプト・カイロにある「死者の街」と同地へのズィヤラ(参詣、墓参)および聖者・聖廟に関連する文化的歴史的現象について総合的に考察することを課題とする「歴史人

類学」的研究である。

それは社会史研究的なモノグラフを意図しているのではあるが、しかし現在、「社会史」の意味範囲が拡散していることから、著者は「歴史人類学」の視座に特定したいとする。その場合の視座は、歴史学の歴史人類学を基本とし、人類学、社会学、宗教学などの隣接科学の手法、データ、分析を取り入れ、最終的には文献研究の歴史人類学に統合するものとする。即ち、歴史人類学的研究の視点としては、歴史研究を主としながらも、日常性の次元の重視、集合心性の解明、社会的結合関係の問題に着目する。その着目点の特徴としては、長期的に持続する中間層への着目、社会や時代の全体的把握への指向、そして諸要素の共時的連関性の補足などの特徴があるのである。

このような歴史人類学的視点の元に、「死者の街」の文化的歴史的現象を記述しているのであるが、そのために次のような目次となっている。

はじめに

序章

第1章 参詣の慣行と実践——歴史民族誌の試み

第2章 聖墓と聖者の創出

第3章 死者の街の消長と経済的基盤——墓地居住、行楽、ワクフ

第4章 王朝政府による統御と死者の街の公共性

第5章 死者の街の聖者をめぐる逸話と奇蹟譚

第6章 エジプトにおけるキリスト教徒の参詣・巡礼——イードと聖遺物・奇蹟

付論1 ムスリム社会の参詣小史——エジプトを中心に

付論2 参詣書写本群の成立

付論3 参詣の書と死者の街からみたスーフイズム

付論4 オスマン朝期の死者の街とその参詣

おわりに

ところで、著者は歴史学を専門とし、12-15世紀のエジプト・カイロのアラビア語を中心とした諸文献を資料として本書を記述しているものと見てとれる。それに対して評者は、宗教人類学、宗教民俗研究を中心的関心とし、トルコ語話者中心の聞き取り、観察、フィールド調査、トルコ語の文献をデータとして研究してきたことからすると、本書の理解が片寄ったもの、あるいは不十分なものになりうる。ここでは、その範囲での書評であることを、あらかじめ断っておきたい。

このように本書は、歴史的な資料を元にして、エジプト・カイロの「死者の街」の参詣慣行のモノグラフを記述し、聖者や聖墓の生成プロセスを、動態的に捉えようとしている。さらには、「カラファ」つまり死者の街における、参詣慣行について、この時代のムスリム以外の人々、例えばキリスト教徒(コプト教徒)との交流、あるいはイスラーム化や類似性について、比較検討し、記述している。

ところで、著者が「参詣慣行」と表記しているのも、それに従う。つまり参詣は「行動」ではあろうが、行為、ハビトゥス、実践と言うよりも、「慣行」として考察することになる。

まず「はじめに」において、本書全体で述べようとしていることを総括している。本書が歴史的記述、論考であることからすると、テーマの歴史的な時代を設定することになる。それについて著者は、本書が扱うテーマの背後には幾つかの歴史的な文脈が流れているとする。その文脈とは次のものである。

まず、研究対象とする地域は、エジプト・カイロを含む「中東」である。この地域は、西暦10-12世紀には大きな変動期の中にあつたと考えられる。著者はその歴史的変化の特徴として「イクター制を骨格とする王朝支配体制の確立、トルコ系に代表される異民族支配者の席卷と在地・非在地のウラマー(学識者)層との協働、遊牧社会の系譜を引くと推定される『緩い連合体』による王朝支配システム、シーア派およびスンナ派を鮮明に標榜する王朝の成立と相互の確執」(p.004)としている。そしてこれに根源的な働きかけとして機能したものの一つとして「いわゆる『聖者』をめぐる社会関係、『聖者崇敬』の現象としての顕在化」(pp.

004-005)があったとしている。

さらに最も広範囲に影響を与えたものとして、この方向は「聖者参詣や聖者生誕祭(マウリド)の活発化と儀礼化、スーフイズムの浸透とタリーカ(スーフイーの道統・教団)の組織化といった諸相へと展開」(p.004)とするとしている。さらに「預言者一族への崇敬や宗教複合施設の建設なども密接に絡み合いつつ、庶民レベルから支配層におよぶ影響力を示し」、「社会のあり方、人々の結びつき全般に再編や自覚化を促す、根源的な働きかけとして機能した」(p.004)としている。

さらに「イスラーム化」という観点もありうることからすると、中東に源を発するイスラームが拡大してゆく過程を根底にして、その時期に「ムスリムの『聖者』が民衆にわかりやすい形でイスラームを体現し、異教徒をイスラーム改宗へといざなった」(p.005)側面と、「ムスリムが大勢を占めたり、ヘゲモニーを握っていた地域においては、聖者崇敬的な要素と密接に結びついた方向へ改鑄されたイスラームを社会の深部にまで浸透させた」(p.005)側面とがあった。それにより「その地において先行していた諸宗教における聖者崇敬的要素を往々にしてイスラームへもたら」(p.005)したとする。

このような歴史的な文脈を念頭に置きながら、エジプト・カイロの「死者の街」の参詣慣行を考察、検討している。その場合、参詣書に限らず、参詣書以外の史料も総合的に勘案し、歴史的に「社会」を研究するならば、単なる「聖者崇敬」の研究だけでは一面的になりうる。さらに、ワクフによる経済的基盤や王朝政府・有力者層による庇護と統御、都市政策をも不可欠な検討要素であると考えられる、としている。つまり民衆の領域でもある「聖者崇敬」、そして民衆の恒常的な参詣を前提とする「王朝政府・支配者層による関与」、また「ワクフによる経済基盤」の三者を重視して、全体を描くことになる。

そのような前提の上で、本書で記述、議論されていることは次のことである。

死と墓地をめぐる慣行と儀礼を考察する。次に、当該期のエジプトにおける聖者や聖者崇敬の実態と、その歴史的意義・役割を示す。都市に対して墓地区が担った役割と機能を総合的に検討する。

そして王朝支配者層による墓地区の統御と整備についての検討をする。ワクフによる経済的基盤の確立もまた、聖者崇敬・聖墓参詣にとっての要諦であったことを示す。

またムスリムだけでなく、ムスリムの統治下に暮らしてきたコプト・キリスト教徒など非ムスリムの存在を念頭に置いて検討する。そのような両者の併存を可能とした「エジプト」を考察するのである。

さらに、ムスリム社会における参詣の歴史をその初源から概観すること、エジプト「死者の街」参詣書の「範型」を作ったと考えられる参詣書の写本を検討すること、聖者崇敬・聖墓参詣とスーフイズムやタリーカとの関係を解明し、ここにスーフイズムの隆盛と浸透の反映の把握、そして参詣書からオスマン朝以降のエジプトにおける参詣書と参詣慣行について検討し、本書の対象時期後の現代に至る見通しを記述すること、などを加える。

これらの作業、検討を通じて、エジプトにおける人々の心性の歴史的諸相を日常性の内に見だし、エジプトにおける死をめぐる民俗、信仰や民衆の日常生活・慣行の歴史研究に寄与したいとしている。

そこで、目次の順に従って、記述内容について見てみよう。

まず「序章」においては、幾つかの本書の方法論的な視点を確認している。

研究対象となる場所、参詣の場所である「死者の街」と聖山ムカッタムについては次のように述べる。「聖山」とするのは、この地域の居住者にとっては、日常的な空間とは異なる空間である特別な山であるからである。ムカッタム山は「一貫してエジプト人達の敬愛を受け、宗教の差違を超えてエジプトを象徴する自然環境物かつシンボルであり続けた」(p.022)とする。そしてムタッカム山の存在が聖性を支え隣接するナイル川・ハバシュ湖が行楽地としての側面を補完していたと推定している。ここでの「聖性」が指し示すものは、「死や墓に関する儀礼」「聖者崇敬」によって構成されていると考えている。

著者は、ここでムカッタムを聖山としながらも「聖所」という表記もしている。祈願や集団礼拝など「俗」とは異なることがなされる場所であることから「聖所」という言葉を使っているのであろう。しかしその「聖所」は、例えばイランなど、現代見られる事例の報告などで使用されることのある「聖所」と同じ意味とは考えられない(注1)。また「聖山」「聖所」「聖者」「聖墓」「聖遺物」など「聖」という言葉が使われている。これは相対的な概念であろうか。それとも欧米において使用することのある「聖と俗」の「聖」と同様に、二項

対立的なものとして理解して良いものであろうか。

「参詣」や「聖者崇敬」という用語についても概念の整理をしている。また本書では、ズィヤーラの「参詣」を広い意味で使用している。イスラームの文脈であればハッジとズィヤーラとの使い分けがなされることも指摘している。

聖者や聖人について、聖者崇敬、聖者崇拜、聖者信仰などの用語についても確認しているが、本書では、「聖者」と「聖者崇敬」を用いている。聖者については、一般に使用されることが多いように思われるが、崇敬、崇拜、信仰などのどの言葉を使うかは、どの言語、どのような文脈で使うかでも、まだ確定していないと考えられる。

ともあれ、本書では「聖者崇敬」を使用しているので、それに従っておく。ただし第6章では、コプト・キリスト教の文脈であれば、「聖人」「聖人崇敬」を使い、ムスリムの場合の「聖者」「聖者崇敬」と書き分けている。「崇敬」について、キリスト教の中で使用される「崇敬」をイスラームの中でも使用するとしているようにも見てとれる。しかし日本語では崇敬を「そうぎょう」とも読むことがあるとすると、神との関係はなくなるのであろうか。聖者・聖人に対する尊敬や崇敬を神信仰との関係でどのように考えるかによっても、異なってくるように思われる。どの言語、どのような文脈で使うのかを考えなければならないであろう。そしてまたイスラーム信仰の中で考えるのか、聖者に対する「志向性」、聖者への「関わり方」、特別な人間への「信仰」にアッラーへの信仰が前提としてあるのか無いのか、様々な考え方がありそうであるが、本書では「聖者崇敬」と表記されているので、それに従っておく。

第1章では、エジプト・カイロの死者の街において12-15世紀の時代に、死と墓地をめぐる慣行と儀礼、参詣がどのように行なわれていたのかを記述している。そのような慣行として、例えば、死者への挨拶、墓への腰掛け、身体の擦りつけ、砂土による病気治し、突き叫び(なきさけび)、クルアーン読誦、供物、献灯、焚香、女性参詣、墓地での礼拝などの慣行、参詣をめぐる諸慣行、ワクフに関することについて、具体的に記述している。さらにここでは、ヴィクター・ターナーの儀礼研究から「コミュニタス状態」が出現するという指摘もある。

さらに、参詣コース、参詣の日時、祈願の規定と実際、諸慣行についても記述している。それらの慣行はイスラームの学者たちが考えるイスラームの規範からは逸脱し、どの法学派のウラマーからも批判されていた(pp.080-081)。

そして参詣者意識における「祈願成就」の仕組みの分析をする。この祈願成就は、聖者による神への「執り成し」によって可能になっていた。祈願成就の構造における、執り成し概念の役割、類型化を試みている。精神的な「贈与交換」の枠組みから、祈願や被葬者との関係を捉え直す試みも行なっている。参詣者の「祈願」(神への贈与)に対する「報奨」は「現世」「来世」「最後の審判の際」のどの時点かで区別されることがあることも指摘されている。

贈与論の議論も書かれている。このような「交換」が成立するとするならば、「同じ土俵」の上にあると考えてしまうのであるが、神には返礼の義務があるとできるのであろうか。つまり不均衡であっても「交換」が成立するとするのか。むしろマルセル・モースが述べているように神への贈与は「供犠」と「契約」として考える方が実態に即していると言える場合もあると考えられる。

この地域では、被葬者は参詣者・墓参者の行為を知覚できる、あるいは被葬者は墓中で寂しがっているという観念が共有されていることも指摘している。

第2章では人々の集合的行動や心性の在り方を動的に把握するために、エジプト・ムスリム社会における「聖墓」や「聖者」の「創出」、そして「聖遺物」の創出について記述している。そして生ける聖者の生成例、あるいは生ける聖者の生成失敗例についても記述し、検討している。

「中世」エジプトのムスリム社会においては、様々な聖墓が創出された。参詣対象となる場所は、聖廟の中でも「頭聖廟」(頭骨による聖廟)、「夢聖廟」(夢・幻視による聖廟)さらには「聖遺物廟」などが創出あるいは失敗した。さらには墓碑の書き換えが行なわれたこと、人々の評判もそれらの創出に関わりがあったことが史料中に出てくるとしている。また「生ける聖者」の生成と生成失敗の例も見られる。

このように、聖墓と聖廟の創出と失敗の例が、史料の中に見られ、このような例が見られるというのも、この語りを創造する側や、そこへの参加者も、聖性についてあらかじめ構想した概念に基づく願望や筋書きに沿う形で、聖廟への参詣、聖者崇敬の行動をしていく(p.134)のである。つまり、マムルーク朝期のエジプトの人々の間には(ムスリムにしてもコプト・キリスト教徒にしても)「ズィヤーラ」(聖墓参詣、生ける聖者への訪問)や「聖者」という概念について、認識があるからである。その概念を構成する一要素、一部分(ナズル〈供物・誓約〉や奇蹟的病気治しなど)でも現出すると「他の要素も連動し、共振する形で、人々は概念の全体像の想定につながる語りを形成」(p.134)する。そして予め構想されていた概念に基づく願望や筋書きに沿う形で、行動していく。その過程の中で、「主催者」側と参加者との間の相互作用で、「崇敬現象」の振幅が広がる。「このような認識の連鎖、聖墓参詣・聖者崇敬をめぐる諸要素からなる集合的心像成立のための条件がある程度固定化(祖型化)し、共有されるようになった」(p.134)のは「少なくともマムルーク朝期にはすでにある程度」確立されていたと推察している。アイユーブ朝期にはすでに代表的な聖墓参詣書が著わされていたとしている。

生前の聖者崇敬と死後の崇敬とを比べると、「聖性確立の成否にかかわらず、崇敬のスタイルや用いられる術語とイデオロムなどに、類似の様相が強く窺え」る(p.135)のである。「例えば、病の治癒やバラカ(神の恩寵)は生前、死後の聖者共に帰される能力であり、女性の訪問・参詣は生ける聖者・聖墓に対して共に可能であった」(p.135)。生前に人々から崇敬を集めていた人物が、死後、聖者崇敬の対象となることはある意味で一般的であった。

また生前の聖者と死後の聖者への崇敬現象の相違点については、生ける聖者の方が、社会的反響が大きく、現実社会への影響が直接的であった。なかでも反権力的な姿勢とその弾圧は、生ける聖者の事例に、より明確に現われるとしている。

そして、女性は庶民と支配層との間にあって、現実社会における仲介者の役割を果たしたと推論される。庶民の中に生じた聖者崇敬に積極的に介入し、家族である支配者層に、情報を伝える役割を担っていた。つまり女性たちは、参詣や聖者崇敬の領域において、社会の周縁にいる者たちと中央権力とをつなぐ役割を果たしていたと推察している。

聖者の基本的な機能は媒介者性であり、埋葬後の聖者と生ける聖者の両方が、参詣者、訪問者と神や支配者層との間を執り成していた。死後の聖者は、参詣者と神との間の執り成しをした、と著者は理解している。

ところで、あらためて、ここに記されている議論を確認しておきたいことの一つとしては、マムルーク朝期のエジプト人の中には「ズィヤーラ」や「聖者」と言う概念について認識がある程度共有されているという指摘である。その概念を構成する一要素、一部分でも現出すると、他の要素も連動し、共振する形で、人々は概念の全体像の想定につながる語りを形成すると著者は述べている(p.134)。とすると「語り」は埋め込まれているのであろうか。あらかじめ定型が存在するのであろうか、それとも語り形成される途上においてつくられていくのであろうか。それともプリコラージュのように手作りしていくのであろうか。

第3章では、ワクフ文書調査をもとに、死者の街の経済などの展開、王朝支配者層による墓地区の統御と整備、そして墓地の運営と居住者たちの生活を詳述している。つまり、まず舞台となるカイロ＝フスタート周辺の墓地区という空間や聖墓地区の歴史的消長を記述し、都市における墓地区の多様な社会機能、そしてワクフ(寄進)による死者の街の経済的基盤などについて通時的視点から考察をしているのである。

アラブ征服期からマムルーク朝に至る死者の街の消長の歴史を辿る。「元々エジプト住民の墓地であった死者の街は、墓廟・モスク・ハーンカーなど諸宗教施設の整備に伴い、その管理運営にあたる人々の住地ともなって」(p.176)いった。「市場・公衆浴場・パン焼窯などの公共設備も整い、さらに、集団参詣の活発化、行楽や遊興の場としての展開から、居住・逗留・建設行為の場として定着」(p.176)していった。この死者の街は、移住を可能にする多くの空間を持っており、カイロ＝フスタート圏の周縁部に位置したことから、外部からの侵入を被りやすかった。そして墓泥棒、略奪も横行していたのである。

ワクフを通じた経済的基盤についてみると、ワクフの制度は、死者の街では欠くことができない制度であった。各墓廟から、ワクフ規定に基づく大量の食糧と財物が人々に惜しみなく与えられた。参詣書とワクフ文書には、墓地における慣行や制度が記述されている。アイユーブ朝期のワクフ文書には、すでに墓廟の

各種吏員や周辺の貧者への給付や、墓地の貯水槽への浄水供給などが定められていたのである。

この第3章から第4章にかけて、描かれていることからすると、確かに「死者の街」の参詣はV.ターナーのいう「コミュニタス」が出現すると考えられる。

第4章では、王朝支配者層による墓地区の統御と整備を描き、死者の街と支配者層との関係を考察する。都市に対して墓地区が担った役割と機能を総合的に検討する。

まず、ここでは、王朝政府による墓地区の統括について考察する。支配者の活動の分析を通じて、「死者の街が支配者層と民衆の貴重な接点を提供していたこと」を明らかにし、「庶民・ウラマー・王朝支配者など、各社会階層の死者の街への関わり方について」(p.179)論じている。ここで社会階層とは、民衆、ウラマー、スーフィー、王朝有力者層、大商人、女性、その他となる。

死者の街では、「全てのムスリムがこの墓地区に関わりを有しており、そこを墓参・参詣したり、そこへ埋葬される権利を有し」「全ての階層の人々が行楽へ繰り出していた」(p.201)。この意味で、あらゆる階層(ムスリム)が関わる事が出来る公共空間を形成していたのである。

またその空間は、性差・年齢・社会階層の混合が見られ、風紀の乱れ、騒乱などの統御をする場になっており、政権の支配下にあったともいえる。そこでは、支配者層自体の参詣、喜捨、建築の場として良き君主を演ずる格好の舞台となった。同時に、庶民との接点となり、パレード、儀礼、軍事訓練を兼ねる遊戯も、その場で行なわれた。さらに支配者層の軟禁、潜伏、処刑、抗争、暗殺の場ともなった。聖域であるはずの死者の街が、支配者層が統御し、我が物顔に振る舞おうとする「マムルークの庭」(p.204)になっていった、と著者は述べる。

カイロ=フスタートの人々は、諸墓地区と何らかの形で関わっていた。そして時代を経ると、様々な階層の人々がこれらの墓地区に居住するようになっていったのである。その中で、支配層にとっては、統御や政争、さらにワクフなどを通じた慈善や自己の来世が保証されるべき場であった。その一方で、民衆にとっては聖墓の創出や墓碑の書き換えなどを通じて積極的に参画できる場であり、墓泥棒の跋扈する空間でもあった。ウラマーやスーフィーにとっては、雇用の場、機会であり、あるいは教育を受けたり与えたりする場であった。女性にとっては、公然と外出できる場所であり、不特定の人々と接触する機会も得られた。

おそらく、この第4章の記述は、「死者の街」の参詣慣行から見たエジプト社会であり、その社会は、特定の時間空間における秩序全体(あるいは全体社会)に関連する「社会史」的な記述をともなっていると言えることができる。

第5章では、聖者をめぐる逸話や奇蹟譚を紹介することを通じて、人々が聖者に仮託していた願望や、彼らの社会的役割について考察している。死者の街をめぐると奇蹟譚、及び「聖者伝」「聖者列伝」の歴史研究である。

ここでは聖者や被葬者の逸話部分の描く世界についてカラーマ(奇蹟・貴行・美質)の議論について記述している。出身地、職業、人気の参詣対象となっている「聖女、障がい者、狂者」について、聖者や被葬者となる記述を辿っている。そして参詣書に見る聖者の逸話、「人を教導して信仰心を呼び起こすような教訓例話や驚異譚(アジャーイブ 'ajā'ib)、カラーマ(奇蹟・貴行・美質)譚」(p.215)を紹介して、考察を加えている。

著者によると、このような逸話は、生き生きとして人々の心を捉えてはなさないものである。このような「参詣書」はウラマーによって読まれているばかりでなく、墓地で参詣のシャイフの口から語られた。死と向き合う人々と語られる瞬間と場が墓地の内に設定され、民衆はそれを語り伝えたと考えられる。つまり民衆に広く流布し、広く共有されるようになったと言えることができる。

第6章においては、エジプトにおける参詣・巡礼について、キリスト教徒とユダヤ教徒など非ムスリムたちの存在も包含して考察することによって、エジプト社会の歴史をトータルに構想する。

アラブ=ムスリム勢力によるエジプト征服後から現在に至る、キリスト教徒(ユダヤ教徒も)の参詣・巡礼を補助線として、ムスリム社会の参詣・巡礼とエジプト社会をより総体的に把握する試みをする。これによって、「エジプトにおけるキリスト教徒の聖人崇敬や宗教慣行の歴史を探究する作業となるだけでなく、

ムスリムの参詣や聖者崇敬、イスラームの拡大・浸透と在地の既存諸宗教との関係、民衆の宗教慣行とその変容全般についての考察にもつながる」(p.259)のものであるとする。

まず、キリスト教徒など非ムスリムの参詣・巡礼の実態を描出する。キリスト教徒にとっての参詣・巡礼は、聖遺物やイード(祭礼日、祭礼、聖人生誕祭)、奇蹟とも深く関わりつつ、聖人崇敬や各種の祭礼と密接に結びついていた。

次に、ムスリム側のズィヤーラ(参詣)とキリスト教徒(とくにコプト・キリスト教徒)の参詣・巡礼との比較検討をし、双方の慣行の特徴や影響関係などを浮び上がらせる。そして参詣・巡礼や墓参を手がかりにして、キリスト教徒やユダヤ教徒との共生を可能にしてきたエジプト社会のあり方を照射する(p.260)。エジプト・ムスリム社会とエジプト・キリスト教徒とは、厳しい排除がなく、曲がりなりにも今日まで、共生してきた。両集団の人々は、日常的な相互接触の内に生きて来たということができる。

エジプトにおける参詣・巡礼や聖者崇敬の次元では、イスラーム到達以降、以前のエジプト・キリスト教社会から継承した部分もあった。その後、共存し、エジプト社会を共に運営する過程で相互交渉により形成された部分、キリスト教徒からムスリムへの改宗者の流入によって生じた部分もある。多くの改宗者が出現することによりエジプト社会に流動、変化が生じることもなった。

ムスリムとキリスト教徒双方による参詣・巡礼と聖者崇敬の相違点であるが、ムスリムにおいては「聖者」の存在やその執り成し・カラーマ、参詣、預言者・聖者生誕祭などが時代を経て理論整備されていくが、常に一神教の理念から学識者からの批判が続いていた。一方、エジプトのキリスト教徒側においても、ムスリム間で議論の対象となったような慣行・観念が存在していたが、むしろ聖人の存在や関連する奇蹟やイード・聖遺物などは強調されがちであった。

参詣・巡礼に関しては、コプト・キリスト教徒の方が参詣・巡礼の現場において奇蹟の発現がより希求された。それに対して、ムスリムの「死者の街」参詣においては、家族連れや女性も行楽性に勝っていた。ムスリムの場合には、メッカ巡礼を除くと、むしろキリスト教徒の方が参詣・巡礼が各種のイード期に集中する傾向にあった。

奇蹟・カラーマの内容を比べると、違いとしては、キリスト教徒のそれは、アイコンや聖像による奇蹟に代表される。カラーマ譚・奇蹟譚に示されたキリスト教徒とムスリム相互の他者イメージであるが、ムスリムにとってキリスト教徒は、聖者の徳によって改宗に至る哀れな隣人・弱者として描写されがちであった。キリスト教徒にとってムスリムは、自分たちを被害者の立場に追いやり、度が過ぎると神によって罰せられる存在であった。このような相違点もあるが、キリスト教徒とムスリムの共通項もあり、これらがエジプト社会を総体的に把握することを可能にする理解につながると考えている。

これに付論が4つ付されている。エジプトを中心にした、ムスリム社会に限定した参詣の小史である。仮説として、10-11世紀には、東アラブ地域において、参詣慣行・対象に関するある程度のコンセンサスが成立したことを推測している。背景に、同一王朝支配や交通と知的ネットワークの確立を予想している(付論1)。

また参詣や墓地区の歴史について考察するためには、エジプトで最も影響力を持った参詣書『ムルシド』とその写本について検討している(付論2)。

次に参詣の書や死者の街とスーフイズムとの関わりについて記述し、解釈している。参詣の書から、エジプト社会における主に12世紀以降のスーフイズムの浸透とその社会集団化について記述し、それに密接に関連してきた死者の街とそれに関連する「場所」について考察する。参詣の書にはスーフイーによる集団活動の様相や歴史的展開が直接にまとめて述べられているわけではない。しかし著者は「聖者」や故スーフイーによる「執り成し」による祈願成就の論理構成の構造がタサウフの交流と共鳴し、聖墓参詣や参詣の書がタサウフと「馴染みやすい」内容を内包していた、とする。そしてまた、カイロ＝フスタート周辺の諸墓地地区がタサウフの展開に空間的根拠を与えており、それは、スーフイーの修道様式を涵養する場となったとし、死者の街やムカッタム山など取り巻いている環境の存在は、スーフイーをめぐる人間集団の形成と維持に必要不可欠であった、としている(付論3)。

また、研究対象とした時期のあと、これら見てきたことが、その後、即ち16世紀オスマン朝統治期以降

どのようになったのかを概観している。これに関して少ないながらも、オスマン朝期カイロの参詣書写本を取り上げ、オスマン朝統治以降の見直しをも考察する(付論4)。

ところで本書を読むと、「死者の街」での参詣という慣習化された行動の多様な在り方の詳細な記述があり、次に「死者の街」のワクフ制度、及びカオスとも言えそうな状況を統括する秩序、そして今度は参詣対象がどのように生成するのかを「逸話」や「奇蹟譚」に探り、最後にムスリムとコプト・キリスト教徒とユダヤ教徒の参詣・巡礼から総合的なエジプト「社会史」を構想していると見て取ることができるようにも考えられる。評者のような、いささか専門を異にする者からすると、研究対象の重心が参詣慣行の記述にあるのか、参詣慣行が生成する要因にあるのか、それともそれを取り巻く関連する「社会」にあるか、不分明であるが、おそらくそれら全てを記述する「社会史」なのであろう。すると序章で述べている「歴史人類学」と後に記述される「社会史」との相違が明瞭ではないようにも考えられた。

ところで、本書は、研究対象とする時期の参詣に関する資料が豊富で良質なものだと言うこともできるのかもしれないが、著者は、それを丁寧に読み込み、緻密な分析を行なっている。本書は、他の地域や民族の類似した現象の比較に供することが可能になっていると見て取ることができる。これまでアラブ人の「聖者崇拜」(マグリブ)(注2)や「聖者信仰」(チュニジア)(注3)に関する成果も出ているが、本書はエジプトの当該地域の「歴史人類学」や「社会史」としても、類似した現象の比較対象の一里塚、起点としても読まれてしかるべきものである。本書は当該分野に関する緻密な刺激を与え、今後の研究の進展に寄与することについては言を俟たないであろう。

(注1) 上岡弘二「イランの民間信仰の聖所をめぐって——その理解のための仕分けの試み」(片倉もとこ編)『人々のイスラーム——その学際的研究』日本放送協会、昭和62年、pp.253-289。および佐島隆・斎藤久美子編『聖所と参詣行動』アレヴィー／ベクタシ研究会、2014年。などを参照のこと。

(注2) 私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』山川出版社、2009年、など。

(注3) 鷹木恵子『北アフリカのイスラーム聖者信仰——チュニジア・セグタ村の歴史民族誌』刀水書房、2000年、など。

(佐島 隆 大阪国際大学国際教養学部教授)

---

## 藤井千晶『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか——タリーカとスンナの医学』(MINERVA 人文・社会科学叢書227) ミネルヴァ書房 2018年 xi+255頁

### 【はじめに】

本書は、ザンジバルを中心的な調査地とし、現地に生きる「人々の間で育まれてきた豊かなイスラーム実践」(p.16)<sup>1)</sup>の一例としてのタリーカとスンナの医学に焦点を定め、それらの実態を多角的に明らかにした一書である。

本書の特筆すべき功績は、現地調査に基づくスンナの医学に関わる詳細な一次資料とそれらを基にした議論(後述)を提示したことにある。本書全体の三分の一に相当する分量がスンナの医学に関わる第III部に割かれている。そこで提示された資料は、ザンジバルにおける「イスラーム実践」の基礎的資料として貴重なものであり、今後のザンジバル、東アフリカ沿岸部におけるイスラームを対象とした研究のみならず、本書と同様に預言者の医学や「民衆のイスラーム」に関わる研究の発展に資するものである。地道な調査によって得られた豊富な情報を研究成果としたまとめたことの意義は大きいものである。

さらに、本書は以下のような特色も有している。第一に、本書は、アフリカ大陸のタンザニアやケニアのみならず、アラビア半島などを含めた地域との広範な歴史的・地域的連関を視野に収めつつ、ザンジバルにおける「イスラーム実践」の詳細を明らかにしている。

第二に、本書は、参与観察に基づく一次資料とあわせて、スンナの医学に関わる現地の治療者たちが作成したスワヒリ語およびアラビア語の文献資料を対象としている。現地調査、原典研究の双方に目配りをして

---

1) 書評対象である藤井氏の著書からの典拠についてはページ数のみを記載する。